

オンライン実心実学読書会第6回 山田コメント資料

—実学と「読む」こと—

2021年9月23日（木） 山田修司*

1 コメントの方針

- 「21世紀の「実学」のあるべき姿を求めて、対話したい」（メーリングリスト片岡先生コメントより）
- 哲学系の論文検討という形式ではなく、読みの広がり、結びつきを探る方針（西田やクザーヌスを論評する能力がない……）
- 防災に携わる文系研究者のはしくれ（二足のわらじとして社会学的なフィールドワークも行う者）、という立場（アイデンティティ）から、「他者」と「読む」をキーワードに断片的にコメントしていくことで、実学への補助線を引いていきたい

2 内容構成

1. コメント方針
2. 内容構成
3. 対象論文の概観
4. 実学と「読む」こと

3 対象論文の概観

八巻和彦（2017）「西田幾多郎におけるクザーヌスとの出会い」『クザーヌス 生きていく中世—開かれた世界と閉じた世界』ぷねうま舎、247-276 頁所収（第Ⅲ部第一章）。

3.1 論文構成：

はじめに（248-249 頁）

1. 『善の研究』（250-252 頁）
2. 講演「反対の合一 **Coincidentia Oppositorum** と愛」（252-255 頁）
3. 「絶対矛盾的自己同一」と「**coincidentia oppositorum**」（256-262 頁）
4. 「予定調和を手引きとして宗教哲学へ」（262-269 頁）
5. 遺稿「場所的論理と宗教的世界観」（270-276 頁）

* 東北大学大学院文学研究科 sh.yamada30@gmail.com

3.2 論文概要：

「はじめに」では、西田幾多郎の思索はヨーロッパ思想家とヨーロッパ哲学者（ケーベル）との対話によって深化発展してきたことが紹介され、西田によるクザーヌスとの対話の遂行を、西田の著作・資料を確認することによって考察していく目的が示される。

全体を通じて、西田とクザーヌスの文献的比較対照がなされていくとともに、西田の思索についてクザーヌスという補助線が引かれつつ考察されていく。西田のクザーヌス理解と解釈、西田の思想におけるクザーヌスの役割、等々が西田の論文および蔵書の書き込みに照らして検討されていく。

そして第5節に、「西田のクザーヌスとの出会い」について西田が出会うことのなかった『神を観ることについて』へ言及することによって、以下のように論文を締めくくられる。

まさにこのような「見当」で西田幾多郎はニコラウス・クザーヌスの「骨」を「掴み」、そして「使用」したのである。最後に引用紹介した、西田が読まなかったはずのクザーヌスのテキストと西田の「絶対矛盾的自己同一」との間に見出される或る近さも、このような西田の思想家としての非凡な「見当」を如実に示しているのだろう。何と深くて豊かな〈他者〉との出会いであったのだろうか。(276頁、強調引用者)

私見であるが、当該論文は、まず西田研究者にとって重要な論文のように思われる。クザーヌス研究者の第一人者によって、西田が依拠するクザーヌスの文献とその解釈が、実に103(!)もの注が振られ、さらには西田の蔵書における書き込みも踏まえながら「西田がクザーヌスの思想に示した関心の所在とその理解を確定するとともに、その上でそれとクザーヌスの思想そのものとの比較対照を遂行」(249頁)されていく当該論文は、資料的に重要であるように思われる。

3.3 〈他者〉との出会いと読書

しかしながら、報告者にはそれを評価する能力がないため、「他者との出会い」をキーワードに、広げていきたい。この方針は、先に引用した「何と深くて豊かな〈他者〉との出会いであったのだろうか」という一文への注目でもある。

上記引用に加えて、「はじめに」でも、西田の随筆『読書』(1938)¹⁾にふれ西田の「出会い」に言及している。西田はショーペンハウアー読書体験の時期、帝国大学の入学時期にヨーロッパ思想という〈他者〉とお雇い外国人教師のケーベルという〈他者〉と出会った。こうして当該論文は「二種の〈他者〉との出会いの中で、西田は自分の思想を紡ぎ始め」、息を引き取るまで「活用しつつ自己の思惟を深め続けた」(248-249頁)と述べ、クザーヌスも西田の「〈他者〉との出会い」という文脈へ位置付けられている。

1) 「青空文庫」でも読むことができる。https://www.aozora.gr.jp/cards/000182/files/3505_53075.html

さしあたり「思想との出会い」に注目すると、出会いは「読書」と置き換えることができるように思われる。ここの読書には、複層性・多層性がある。当該論文を読む、著者を通じて西田を読む、西田を通じてクザーヌスを読む、クザーヌスを通じて西田を読む、……というように、より細かくカテゴリーを挙げていくことが可能だろう。クザーヌスを読むについても、クザーヌスが書いた文章を読む、クザーヌスの翻訳を読む、クザーヌスについての論文（文章）を読む、西田のクザーヌス解釈を読む、……というような方法の翻訳²⁾がある。

また、論文の「内側」だけでなく「外側」との関係も、「読む」の複層性・多層性である。当該論文では西田の思考として時系列な深まりが所与とされている。では当該論文は、もともとは単発の論文であることから閉じて読むべきなのか、それとも収録された本のなか（『クザーヌス 生きている中世』）に位置付けて読むべきなのか、あるいは八巻和彦という一人の著者の一連の思想として読むべきなのか（アイデンティファイして読む）云々といった問い方ができるだろう。

これらを分野や関心領域における方法論上の問題にすぎない、と片付けることもできるかもしれない。または著者の意図に従うべき、という作者主義の立場もあるかもしれない³⁾。クザーヌスや西田へはもはや直接に聞いて確認することはできないが、それでも周辺の文献・資料も含めて意図を可能な限りに確認することは可能なかもしれない。また八巻先生へは直接に確認する手段が原理上は残されている。この問いは、ドナルド・デイヴィッドソンの「寛容の原則（principle of charity）」をどう適用するか、と言い換えることもできるかもしれない。あるいはリチャード・ローティによる哲学史研究についての議論（合理的再構成、歴史的再構成、精神史）などを参照すべきなのかもしれない。

しかしながら、ここで報告者が問題にしたいことは、上記のような方法論へ評決的判断をすることでもない⁴⁾。実学というプロジェクトへ向けて、「他者との出会い」と「読むこと」を補助線として、科学的な探求についての問いを浮かび上がらせてみたい。

2) ここでの「翻訳」は言語から言語への翻訳ではなく、ブルーノ・ラトゥールらのアクターネットワーク理論（ANT）における概念装置である。当然ながら「論文」は制度的に裏書きされているという負荷的な「文章」である。文章も、「書く」という行為を成り立たせる一連の舞台装置があって、はじめて存在している。さらには、ことわりなく「読む」と使ってきたが、現代的な意味での読むとは異なる「読む」のあり方が、第Ⅲ部第三章「開かれた世界、開かれた書物」で考察されている。このような「読む」をANTをふまえて問題化するならば、「たとえばクザーヌスの思想」なるものへの解明というプロジェクトを、客観普遍的な対象として発見するものと措定するのか、それとも一連の舞台装置をもって構築していく／されていく対象とするのか、といった方法論を規定する理論的な問題が明るみとなる。

3) 芸術の分野ではモンロー・ピアズリーによる「意図の誤謬（fallacy）」、工学的人工物についてはドン・アイディによる「設計者の誤謬」という議論がある。彼らにしたがえば、仮に真理や価値（作品の解釈、人工物の使い方、など）が発見されるものだとしても、作者やデザイナーの意図へ還元することはできない。

4) 時間があれば、八巻先生はじめ思想史研究に携わる参加者の方々の意見を、それはそれとしてお聞きしたいところではあります。

4 実学と「読む」こと

4.1 実学の定義

本来であれば源了圓先生をはじめとする実学思想の系譜⁵⁾をたどるべきかもしれないが、暫定的に、研究会による実学の定義を確認する。

本会の英語名称のうち‘TRUE AND REAL LEARNING’の部分が、「実学」に相当します。つまり、本会における「実学」とは、真実（誠実）かつ現実（実在）を追究する学問を意味しています。

どちらの場合も‘真理’の追求をめざす点で変わりはありませんが、前者（true）の場合は人文科学的、後者（real）の場合は自然・社会科学的なアプローチにそれぞれ重点があります。前者を「実心」、後者を狭義の「実学」とすれば、「実心実学」の四字にもなります。

「脱真実」（post-truth）の時代とも言われる今日、わたしたちは新たな真実（truth）と現実（reality）の構築をめざして活動しています。「自分たちの生き方を思想化し、自然と社会に責任をもつ学問」（会則第一条）こそ、わたしたちの「実学」の定義です。（日本東アジア実学研究会 web サイト⁶⁾）

4.2 防災と科学

こうした実学の観点から、報告者にとって防災との関わりが関心となる。というのも、防災の専門家にとって、人文・社会科学はあまり有益とは考えられていない現状があるからだ。報告者にとって実学の問題意識は、そうした防災の専門家に対して、文系研究者から、どのように応答すべきか、にある。以下に引用した文章は、少し長いが日本を代表する防災の専門家によるものである。

日本にはサイエンス＝自然科学と考える傾向がある。しかしサイエンスは「問題を捉え、回答を見つける方法」である。「仮説」があり、「実証的な方法」を活用して、「合理的な結論」を引き出すプロセスを、誰もが納得する方法で行う活動である。1979年にUCLAの大学院に留学した際、「方法論」としてのサイエンスを痛感した。米国は移民の国であり、世界中から人が集まり、文化、考え方、好みもばらばら、多様である。そうした状況の中で人々が平和に暮らしていくためには、最低限の「社会常識」が必要となる。それを、短時間で合理的に確立できる方法が科学なのである。そこに米国において実証的な社会科学が顕著に発達してきた理由がある。一方、日本は2000年にも及ぶ長い年月非常に同質性の高い社会を維持してきたため、科学的に社会常識を作る手法を必要としてこなかった。

明治時代以降、当時個別科学化が完成した科学技術を輸入することで、富国強兵を

5) 研究会 web サイトでも、源了圓（1986）『実学思想の系譜』、小川晴久（1994）『朝鮮実学と日本』花伝社、があげられている。

6) https://jitsu-ken.net/?page_id=138

スローガンに日本は工業化を推進してきた。その流れは戦後も続き、民生分野で欧米に追いつけ追い越せと、自然科学や工学に注力してきた。一方、同時に輸入された人文・社会科学では欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりする訓詁解釈学が主な研究スタイルとなり、合理的な常識を作る方法論としては機能していない。(強調引用者)⁷⁾

こうした防災の専門家による主張に対して、反論することは困難ではないだろう⁸⁾。一方で、全面的に反論したい欲求にかられつつも、部分的な妥当性を受け容れる必要があるのかもしれない。「合理的な(社会)常識を作る」というプロジェクトは、自然現象への対策に限らず、2021年現在での新型コロナウイルス対策での「ニュー・ノーマル」といった表現にも通底する専門家の思考/志向であるようにも見える。whatの解明だけでなく、howへつなげること、あるいはつなげうる議論を提供することが研究者の役割であるならば、人文・社会科学に携わる者として、どういった主張(反論)をすべきであろうか。また実学のあり方とどのように関係するのだろうか。

ここでは、細かく反論するよりも、引用にある「欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりする訓詁解釈学が主な研究スタイルとなり、合理的な常識を作る方法論としては機能していない」という批判を受けて、実学のあり方を探る・実学を深める方法を探りたい。

4.3 〈他者〉との出会い

実学のあり方を探る・実学を深める方法を探るため、以降、当該論文を、収録された書籍『クザーヌス 生きている中世』(以下、当該書籍)のなかに位置付けて読んでいく。

当該書籍は、「クザーヌスの思想を21世紀に活かすこと」(503頁、「あとがき」という課題を受けて執筆された)と「あとがき」に記される。そして、当該書籍のテーマが「まえがき」で以下のように述べられている。

……われわれは「開かれた世界と閉じた世界」という両方の世界を必要としているのである。多様な自然条件ならびにそれを基礎にしている多様な社会条件に基づいて自分たちに適した生活を送るためには、それぞれの地域に生きる人々が、自分たちの流儀で開く時と閉じる時を確保できることが不可欠なのである。今、ここでこの点に深く立ち入ることはできないが、われわれが何かじっくり考えようとする時には、静かに目を閉じて、頭の中でそのことを反芻するような、そのような〈閉

7) 林春男(2019)「巻頭エッセイ 防災対応のサイエンスを」『科学』岩波書店。本稿では岩波書店 web サイトを参照した。<https://www.iwanami.co.jp/news/n30400.html>、2021年9月21日アクセス。

8) たとえば、防災の専門家が好んで「参照」する寺田寅彦の議論を材料にすることもできる。「天災は忘れた頃にやってくる」は、寺田の文言として文献的に確認されないが、時代背景として科学者一般の主張として寺田の思想としては紐づけることが研究者たちによって明らかにされている。むしろ教育に重きを置いていたことが寺田の独創性であり、その科学観は、防災「技術」へもつながっている。また、皮肉にも寺田自身は、技術官僚たちに担われていた土木工学に対して「輸入学問」という手厳しい批判を向けている。寺田における防災の科学と技術の両義性についての考察は、拙論(forthcoming)を参照されたい。

じ)である。これの典型は、本書第Ⅲ部第二章4〔293頁〕で扱っている「地理学者」cosmographusの姿である。(3頁、「まえがき」)

ここに、第Ⅲ部第二章の収録論文が、当該書籍のテーマに中心的に関わる論文であることを読み取れる。

西田の出会いにおいて登場した〈他者〉は、「変幻自在な〈他者〉」として、第Ⅱ部第三章に収録される論文「〈他者〉の豊穰性」(213-243頁所収)の以下の箇所¹で定義されている。

〈他者〉とは、各自がその移転で重心を置いているアイデンティティの範囲で、〈自己〉ではない存在のことである(226頁)

……われわれにとって〈他者〉の意味が変幻自在であることの原因がわかる。それは、われわれが生きている過程で、自ら〈他者〉を生み出しているということでもあるのだ。つまり人間は、自身の有する重層的アイデンティティに依拠しつつ、上述のように重層的な〈他者〉との交わりを遂行しているのである。しかしながらもちろんのこと、この交わりの目的は〈他者〉を生み出すことではなく、自分と相手との間の〈他者〉性を解消することであって、それによって人間としてともに安らかに生きようとしているのである(227頁)

日常的な意味での〈他者〉も具体的に描写されているが、さらに、より抽象的な〈他者〉が2種類取り上げて考察されている。一つは「自己の内部にいる〈他者〉」(227-228頁)であり、いまひとつは神という〈絶対的他者〉(228-229頁)である。前者は近代における人間の主体性というテーマの機制とともに近代西洋哲学の重要なトピックのひとつである。後者は、注釈で当該論文の西田の「絶対矛盾的自己同一」と『老子』11章の「無用の用」へ通じると記されている(460頁、注33)。

引用した「〈他者〉の解消」とは、〈他者〉の排除とも同調・同一化とも異なるように描かれている。

〈他者〉は〈他者〉であるというそれだけのことで、その〈他者〉自身にとってはもとより、われわれ自身にとっても意義のある存在であるということをしっかりと認識しなければならぬのである(242頁、強調引用者)

ここでの「認識」に、当該書籍で論じられる知恵や理解、思考を重ね合わせることはできるだろうか。〈他者〉の成立する機制を認識＝理解することによって、〈他者〉は豊穰へと止揚されるという、いわば弁証法的な思考が述べられているようにも思われる。あるいは、〈他者〉の理解から「〈他者〉理解」の理解という超越論的な思考形式を指摘しうる、と言い換えられるのかもしれない。

このような「〈他者〉理解」の形式を想定すると、科学や学問のあり方へと結びついてくる。そのとき、第Ⅱ部第三章論文のなかでは、「自然という他者」については言及されていないことが不思議に思える。ここでは人間同士の関係がテーマであり、他の論文で扱っているためにあえて省かれているのか、「神」のなかに予め含意されている、と読むべきなのだろうか、報告者には判断がつかなかった。もしも、第Ⅱ部から第Ⅲ部をつなぐテーマとして「〈他者〉との出会いとしての読書（読むこと）を通じた〈知恵〉の探求」を仮に設けることは可能であろうか。〈他者〉の機制への理解・思考それ自体が、読書（読む）という過程における意義だと述べることはできるだろうか。西田についての論文が第Ⅲ部のはじめに置かれていることに、何か意味を読み取りたくなる。

もし可能であるならば、寺田寅彦による以下の文章が、自然という他者との交わりとしての科学や学問についての理解・あり方という（報告者の）問題意識とともに、第Ⅲ部第二章論文（テン先生担当）への橋渡しになるのかもしれない。

頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって「致知」の一部に過ぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウパニシャドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出す手がかりをもっていない。そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い誤り思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるためには少なからざる障害となるであろう。⁹⁾

引用しておきながら大変申し訳ないが、「格物致知」について、報告者は理解が追いついていない。ぜひ参加者よりご教示あればありがたい。場合によっては、これまでの論旨は報告者のまったくの見当違いである可能性もあるだろう。

4.4 まとめ：報告者からのコメント

以上をふまえて、報告者からの八巻先生（あるいはフロア）へのコメント（質問）は以下の3つである。当該論文に直接関わる質問は（2）であり、時間が限られていることから優先順位は（2）→（3）→（1）と考えている。

9) 「科学者のあたま」（初出は1933年）、青空文庫から引用。 https://www.aozora.gr.jp/cards/000042/files/2359_13797.html

1. 「欧米の学者の研究成果を学習したり紹介したりする訓詁解釈学が主な研究スタイルとなり、合理的な常識を作る方法論としては機能していない」という主張に対して、「クザーヌスの思想を 21 世紀に活かす」という課題を踏まえて、どのように応答されるでしょうか？
2. 〈他者〉性の解消について、当該論文で「西田の出会い」の文脈で説明することは可能でしょうか？
3. 「自然という〈他者〉」という問い立ては可能でしょうか？

最後に、報告者がもっとも惹かれた文章のひとつを、下に引用しておく。第Ⅲ部第三章「西欧における「開かれた世界、開かれた書物」」（303-331 頁所収）のなかで述べられている。

……読み手は、その書物を読むときにはその時点で自らのコードに依拠して読まざるをえないという意味で〈閉じた〉態度をもって書物に向かうのだが、読んでその書物の内容を理解したときには、その読み手は読んだ書物の内容によって自らが新たな地平へと〈開かれる〉のである。そして、このような、〈開き〉と〈閉じ〉を繰り返しつつ自らの世界の拡大と豊穡化を成立させる読書という体験の面白さと有意義さが、読書という社会的営為を成立させ、多くの人々が進んで書物を購入し、読書に時間を費やしてきたのであろう（329 頁）¹⁰⁾

おそらく、われわれ人文系の学問を遂行するものだけでも、この文章を肯定し続けなければならないだろう。

(以上)

10) 注では現代的なウェブの情報へも言及されている。(484 頁、注 64)